



イタヤカエデの原木で作るイタヤキツネは、そのまま飾ったり、箸置きにしたり、束ねてお玉置きにも。素材で温もりたっぷり。
◎イタヤキツネ 1,050 円



武家屋敷の街並みが残り、みちのくの小京都として知られる仙北市角館町。桜の季節にはなんと百万人を超す観光客が訪れるといわれています。

寒い土地に育つイタヤカエデの原木を使うイタヤ細工は、寛政年間（1789〜1801年）に農具として作られ発達してきたもの。「暖かい土地は竹細工が主流ですが、こちらは太い竹が育たないため、イタヤカエデを材料にした訳です」と、ご主人の菅原清澄さんすがはらきよすみが説明してくれました。

かつて菅原家では、農業のかたわら、箕み（23ページ写真参照）やかご類を作って売り歩くのを副業としてきました。しかし昭和になって農業の機械化が進むと、需要が激減。清澄さんのおとうさんは、バッグや小物入れなど、新しいイタヤ細工製品を創出し、デパートの物産展に持ち込んだそうです。すると、実演販売の珍しさも手伝ってか、たちまち話題を呼び、全国のデパートに招かれるようになりました。目の前で、みるみる手仕事で編み上がる美しいかごを求め、行列ができるほど賑わったとか。

こうしておとうさんの代にイタヤ細工専業となり、その後、会社勤めだった清澄さんも家業に入りました。

現在は代替わりし、清澄さんと奥さまの文子さんが作り、各地の催事場へも夫婦で出向いています。

築120年の母屋の工房で、菅原さん夫婦は向かい合って仕事をしています。文子さんは書類箱を編む作業。床に這うようにして、細く切りそろえた材料を手際良く編み上げていきます。一方の清澄さんは縁ぐちを取り付ける作業。水につけて材料をしならせ、内枠、外枠をピタリと合わせて仕上げていきます。

清澄さんによれば、この作業より大変なのが材料の準備。山から切り出したイタヤカエデの原木を帯状に裂き、箕で3mm、かご類で1mmの厚さに切りそろえるのです。しかも1本1本、角の面取りもしなければなりません。結局、全工程を考えると、かご1個を作るのに、まる1日かかってしまうそうです。昔は清澄さんも山に入りましたが、製品作りの時間が足りず、近年は職人さんに材料手配を頼み、切りそろえる作業から手がけるようになったそう。

箕をはじめ、手揚げバッグ、盛り皿、おにぎりかご、書類箱、工房の一角には、お二人が作った大小のイタヤ細工が並んでいます。よく見る



イタヤ馬とイタヤキツネを染め抜いた工房旗。デパート催事などに持ち込んで掲げるそうです。

◎ちよつといいモノ語り／民芸イタヤ工房「秋田県仙北市」

寒い風土と

伝統の手技が生み出す

白い木肌の温もり

藩政時代の農具から発達した、秋田県伝統的工芸品「イタヤ細工」。仙北市角館町雲然地区くもしかでは、かつて100軒を超す農家で作っていましたが、現在は3軒が専業、数軒が副業として作っています。今回は、夫婦二人三脚で美しい品々を作り出す「民芸イタヤ工房」を訪ねてみました。



網代編みの手揚げかごは、草木染めや染料で色づけしたのも人気。これらも使うほどに風合いが増すとのこと。
◎手揚げかご（茶）18,900 円、（青）15,750 円



内枠と外枠とも繋ぎ目が隠れ、しかもピタリと合うよう縁を取り付ける菅原清澄さん。

幾何学模様がモダンな印象のテッセン編み盛り皿。竹ひごなどで絵葉書を取り付け、壁飾りにもできます。
◎テッセンかご 5,040 円



切りそろえる前の「クサ」と呼ばれるイタヤカエデ材料。



四つ目編みの書類箱を編む文子さんの手元。平面から立ち上がる角の部分が最も難しいそうです。



内側に押された、ご夫婦の名前の焼印が確かさの証です。お二人は中学・高校の同級生で息もピッタリ。



民芸イタヤ工房
秋田県仙北市角館町雲然荒屋敷 231-1
TEL.0187-53-2609



白い木肌が美しいテッセン編みの「おぼき」。編み方によって表情は大きく違ってきます。
◎丸かご 26,250 円



山ぶどうの花入れ。自然の素材だからこそ、ちょっとした花でも豊かな印象に。
◎花器 8,400 円



毎日持ち歩くのが嬉しくなる、山ぶどうのジッパー付きポーチ。内側に布を張った技アリの1点もの。
◎山ぶどうポーチ 15,750 円



イタヤ細工のルーツといえる箕。使い勝手を考え、途中で編み方を変えるなど、伝統美と機能美は見事。
◎箕(小) 15,750 円、(ミニ)10,500 円



縁起物とされる左向きのイタヤ馬は、バカバカと福を運んでくるとか…。足を開けば立たせることもできます。
◎イタヤ馬各 525 円



この地方で「おぼき」と呼ばれる物入れ。花を飾ったり、筒状のものを収納したり、いろいろ活躍しそうです。
◎丸かご(茶) 18,900 円、(青) 15,750 円



材料を切りそろえて染め、その後1本ずつ面取りをしてから編んだ盛りかご。2色使いのように見える、手が込んだ品。
◎盛りかご(小) 3,890 円、(大) 5,040 円



奥が四つ目編み、手前が網代編みのおにぎりかご。小物入れや裁縫箱など、使い方は自由です。
◎おにぎりかご(四つ目編み) 2,940 円、(網代編み) 5,040 円
※表示価格はすべて税込です。



地元で採れる高級素材、山ぶどうの樹皮で編んだ手提げかご。イタヤの手法により、よりしなやかで軽い仕上がります。
◎山ぶどうかご 39,900 円より



皮革のあしらいがお洒落な手提げバッグ。A4サイズの書類や雑誌が入るので、ビジネスバッグとしても重宝しそう。
◎革ベルト付かご 21,000 円

と、編み方が何種類もあります。昔ながらの箕などに使われ、目が詰まっているのが網代編み。隙間があつて軽やかなのが四つ目編み。そして、白黒の盛り皿が代表的なテッセン編みは、一層モダンな印象です。「テッセン編みは、苦労しましたね」と清澄さん。20年ほど前、伝統の方法にアレンジを加えたとのことですが、編み目を見ながら試行錯誤するうちに、目が回り嘔吐することもあったそうです。「実は、失敗から偶然生まれたんですよ」と照れくさそうに話してくれました。失敗から生まれた作品が、今や代表作品のひとつになったというのも手仕事が生み出すおもしろさかも知れません。

「かごの内側を見てください、継ぎ目がないでしょう？」との文子さんの言葉に従って見ると、手提げバッグの中も、丸いかごの中も、編み目がそろつてすつきり。「大きさに合わせて、あらかじめ材料の長さをそろえていますからね。いかにも丁寧な仕事ぶりで、これなら布を張ったりせずに、気持ち良く使えます。今は真っ白な木肌ですが、使ううち、年数が経つうちにつややかな餡色に変わってくるのも魅力。

また、泥染めや草木染めなど、さらに手間をかけた製品の風合いも素敵です。山ぶどうの樹皮で編んだ手提げバッグや藤のバッグも見つけました。「これらも、イタヤ細工の手法を生かし工夫しているので、しなやかで丈夫ですよ。」

ところで、かご細工は修理が利くことをご存知でしたか？ 取っ手部分の付け替え、穴の継ぎはぎなど、丁寧に修理に応じています。「ここで作ったものに限りませんが…。今も、20年前に親父が作った手提げの修理品が、広島から届いています」。まさに一生もの、代々に受け継がれる逸品ならではの。

北海道から九州まで、菅原さん夫婦が出向くデパート催事は、年間5カ月にも上ります。工房で作るのはもちろん、半製品を持ち込み、会場で完成させないと間に合わないケースも多いとか。「手間はかかるけど、お客さんに喜んでもらえるのが何よりですね」と清澄さんが言えば、「毎年行く会場では、待っていてくださるお客さんもいて、ありがたいですね」と文子さん。寒い風土に育まれたイタヤ細工の温もりを待つファンは、全国に広がっています。

※1月16日、イタヤ箕の製作技術が重要無形民俗文化財に指定されました。

◎読者レポーター募集！ このコーナーの取材に参加して下さる方を募集します。詳しくは33ページをご覧ください。